

大動脈弁閉鎖不全症に対する大動脈弁温存術の検討

林 裕之、岡 隆紀、常深孝太郎、久保 沙羅、大北 裕
(高槻病院 心臓大血管センター)

【目的】

当院での大動脈弁閉鎖不全症 (AR) に対する大動脈弁形成術の早期から中期成績を大動脈弁基部置換群 (R 群)、基部非置換群 (non R) 群に分け比較検討する。

【対象】

2018 年 6 月から 2021 年 4 月までに当院で施行した AR に対する大動脈弁形成術 45 例を対象とした。男性 33 例、女性 12 例。年齢 66.2 歳 ± 12.9 (27 ~ 84 歳)。同期間に AR に対する大動脈弁置換術は 6 例に施行した。

【方法】

これらを R 群 21 例、non R 群 24 例に分け、各群の術前後 AR の程度、左室径について比較検討を行った。

【結果】

病院死亡なし、再手術を要した症例はなし。術前 AR は severe 22 例、moderate 11 例、mild 8 例、trace 4 例であった。術前 LVDd = 53.4 ± 8.2 mm, LVDs = 35.5 ± 7.5 mm。全体の心エコーフォローアップ期間は 13.4 ± 9.40 ヶ月で、フォローアップの AR は severe 1 例、moderate 2 例、mild 27 例、trace 15 例、LVDd = 48.1 ± 5.8 mm, LVDs = 32.0 ± 6.4 mm であった。術前と比較して術後の AR、LVDd、LVDs は改善を認めた。フォローアップ中に AR severe を認めた 1 例は術後 6 ヶ月後に再手術を行なった。弁尖にかけた縫合糸による cutting が原因と考えられた。

【結語】

大動脈弁形成術は AR に対して有用な術式であった。